



おひざのうえで

(副園長の子育ておうえん通信)(2021年7月)



せんりひじり幼稚園
副園長 安達かえで

「子どもの育ちを伝えたい」

6月に、東京大学の発達保育実践政策学センターCedepと、シンガポールとの共同研修が行われました。そこで、日本の幼稚園としてせんりひじり幼稚園が紹介され、園長がシンポジウムのパネリストとして登壇しました。事前に両国の取り組みを動画配信し、それを観てからオンラインシンポジウムに参加する形です。動画で、せんりひじり幼稚園の保育を20分でまとめてほしいと依頼され、非常に難しいと感じました。主体性を育てるための対話的保育の様子を伝えたいと思っても、一場面だけを切り取って伝えるのは難しく、あれもこれも伝えたくまりました。研修テーマが、カリキュラム・リーダーシップと現職研修でしたので、保育の様子だけでなく、園内研修や若手育成の振り返り会議の様子、そして子どもの写真を使って育ちを解釈する会議の様子も流しましたが、シンガポールの先生方から、保育者がこんなに丁寧に子どものことを語り合っていることに驚き、真似をしたいという感想をいただきました。一方で、シンガポールの先生方が、お洒落なパワポを使って豊かな言葉で熱く語っておられ、説明する技術の高さを感じました。5年ほど前にシンガポールの幼稚園をいくつか視察したときに、SPARKという評価システムによって乳幼児教育を変えようとする勢いと熱い思いに刺激を受けたことを思い出しました。

先月、園庭にあんずの実がいくつもなっているのを見つけた年長組の男の子たちが、タケ先生と一緒に収穫して、どうしようか相談しています。そしてあんずのゼリーを作ってゼリー屋さんをすることに決めたようで、手順を書いていきます。1・優しく洗う 2・皮をむく 3・種を取る 4・小さく切る 5・大きなお鍋で煮る…。そして今日はどこまでするか、明日の何時からゼリー屋さんを始めるか相談しています。お店に必要なものを考えて、看板を作り、机を並べて、お店に来た人が順番に並べるように足元にテープを貼ったり…。やるのが早い!! やりたいことをするときの子ども勢いは大人が付いていけないほどです。大盛況だったゼリー屋さん。あっという間に70個ほどの小さなゼリーが売り切れると、「早かったなあ…」とつぶやいていました。自分たちが食べる分を残すことは頭になかったのか、ゼリー屋さんをするプロセスが楽しかったから自分たちは食べなくてもよかったのか、あっという間に売り切れた様子を見て言ったひとつは…「どんな味やったんかなあ〜」でした。そんなこともあるかと、取っておいた残りのゼリーを出すと、ゆっくりゆっくり味わって食べていました。日々、幼稚園の遊びや生活の中で子どもの発想や主体性に驚かされます。やりたいと思ったことはきっとできると信じているところが、素晴らしく、心動かされます。

先日の七夕ウィークでは、年長組が七夕のパーティーを企画し運営しました。自分たちで司会をして進め、花火や劇やおどり、マジックなどを自分たちで考えて披露していました。先ほどのあんずゼリーや、この七夕の素晴らしい営みを伝えるときにいつも思うのは、その空気感や子どもの育ちを伝えることが難しいということです。私の表現技術の問題もあると思いますが、「子どもの育ちをうまく伝える」という課題を、クリアしていきたい。シンガポールの先生方の表現力に学んだ一日でした。

保護者の皆様にはポートフォリオでお子様の育ちをお伝えしていますが、伝わっているでしょうか。きっと。担任はコメント欄にもっと書きたいと思っているでしょう。限られたスペースや時間の中で、子どもの育ちを語るには、子どもの育ちが素晴らしすぎて、言葉が追いつかないということなのかもしれません。長くて暑い夏の間、そんな育ちを見逃さないように過ごしたいですね。どうぞ体調に気を付けてお過ごし下さい。

あんずゼリー物語

